

神学校に入ってからのことでした。珍しく、牧師に相談したことがあります。と言うより雑談の中での質問だったに違いありません。重要なことは、相談ではなく、偏見に満ちた独断が常でしたから。「あなたは、何でも決めてから話すんだね」と母は言いました。

「教会で奉仕をするべきだと考えますが、何にしましょうか。」オルガン、ガリ切などを考えていました。謄写版時代です。原紙に鉄筆で美しく字を書いて行くのは大事なことでした。当時、教会には山田稔神学生がいて、定規を使って角ばった書体で実にきれいに書いていました。この方は先ごろ、衣笠ホームから最後の旅立ちをされました。牧師は、簡単に原則を示しました。

「他の人、信徒の仕事を奪うようなことをするべきではないよ。」

これで私の人生は、無趣味なものになったようなものです。

ここから考えました。音楽の奉仕者は大勢いました。字のきれいな人もいます。何事であれ、努力が大切です。努力も才能の一つ。自分には才能がない、と考えていました。自分が好みに任せて奉仕を選んだ時、将来にわたって信徒が奉仕する道を閉ざしてはならない。そればかりではない。自分の能力を誇り、その分野で偉い人になろうとする野心家になるな。

「そうであれば、誰もやりたくないことを選ぶことになる、と考え着きました。これは我が家で教えられて来たことに通じます。

「将来、職業選択の時が来たら、みんながやりたいと考えるようなことではなく、誰もが避けることを選びなさい。やりたがらないことをやりなさい。確信をもって君が選ぶことなら、破廉恥罪でなければ、すべて支持します。」父の言葉でした。預言者たちも自分がやりたくないことをやらされました。預言者を自認することはできません。それでも主のご計画に委ねます。